慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	1980年代以降のピアノ文化 : ピアノ文化の繁栄と高級なアマチュア
Sub Title	Piano culture from the 1980s onward: the prosperity of piano culture and high-ranking amateurs
Author	本間, 千尋(Honma, Chihiro)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2014
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.78 (2014.) ,p.85- 107
JaLC DOI	
Abstract	Though the piano is originally a European instrument, many Japanese people are more familiar with the piano than they are with Japanese instruments. Piano culture expanded in Japan during the period of high economic growth, namely from 1954 to 1973, and therefore today many in Japan play the piano. However, piano culture developed even more substantially following the period of high economic growth, especially from the 1980s onward. For example, during this period many of those learning to play the piano participated in piano competitions. This study focuses on piano culture in Japan from the 1980s. I analyzed the 1980s piano culture using interviews. The number of learners aspiring to study piano began to gradually decrease at this time. However, the number of "high-ranking amateurs" increased. High-ranking amateurs are skilled piano players who have never studied piano at a music college. Playing piano is merely a hobby to them. They choose to clear a fiercely competitive entrance examination, and go on to study something other than music. Bourdieu classifies interests into two groups: "interests of necessity" and "interests of luxury." According to Bourdieu, high-ranking amateurs have interests of luxury, because to them playing the piano is far from a necessity. They do not need to earn a living as music teachers. However, their piano playing does not constitute an interest of luxury according to Bourdieu. Rather, high-ranking amateurs have learned to play piano at the insistence of their parents; —they had to study piano earnestly since they were children. Piano culture is also part of the education of high-ranking amateurs.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000078-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

1980年代以降のピアノ文化

——ピアノ文化の繁栄と高級なアマチュア——

Piano Culture from the 1980s onward

——The Prosperity of Piano Culture and High-Ranking Amateurs——

本　間　千　尋*

Chihiro Honma

Though the piano is originally a European instrument, many Japanese people are more familiar with the piano than they are with Japanese instruments. Piano culture expanded in Japan during the period of high economic growth, namely from 1954 to 1973, and therefore today many in Japan play the piano. However, piano culture developed even more substantially following the period of high economic growth, especially from the 1980s onward. For example, during this period many of those learning to play the piano participated in piano competitions.

This study focuses on piano culture in Japan from the 1980s. I analyzed the 1980s piano culture using interviews. The number of learners aspiring to study piano began to gradually decrease at this time. However, the number of "high-ranking amateurs" increased. High-ranking amateurs are skilled piano players who have never studied piano at a music college. Playing piano is merely a hobby to them. They choose to clear a fiercely competitive entrance examination, and go on to study something other than music.

Bourdieu classifies interests into two groups: "interests of necessity" and "interests of luxury." According to Bourdieu, high-ranking amateurs have interests of luxury, because to them playing the piano is far from a necessity. They do not need to earn a living as music teachers. However, their piano playing does not constitute an interest of luxury according to Bourdieu. Rather, high-ranking amateurs have learned to play piano at the insistence of their parents; —they had to study piano earnestly since they were children. Piano culture is also part of the education of high-ranking amateurs.

Key words: piano culture in Japan, piano competitions, music colleges, high-ranking amateurs, interests of luxury

キーワード：ピアノ文化，ピアノ・コンクール，音楽大学，高級なアマチュア，贅沢趣味

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻 博士課程

1. はじめに

1-1. 問題意識

現在日本では，子どもに楽器の演奏技術を学ばせる際に親はピアノを選ぶ場合が多く，我々は自国の伝統楽器である琴や三味線よりも，西欧の楽器であるピアノの方に親しみを感じる。18世紀イタリアのフィレンツェで発明されたピアノが日本に移入されたのは明治期であるが，わずか130年くらいの間に日本はピアノ文化[1] 後発国の域は脱し，ピアノ文化経験者や国際コンクールの参加者は本場西欧を凌ぐほどである。その背景には日本のピアノ文化の礎になった高度経済成長期におけるピアノの普及があることは言うまでもないが，それ以上に，高度経済成長期終焉以降のピアノ文化が大きく影響しているものと考えられる。

総理府が実施している「国民生活に関する世論調査」によると，自分の家の生活程度を「中」（中の上，中の中，中の下のいずれか）に属すると答えた人々は，調査が始まった1958年には約72%であったが，人々の生活水準は次第に上昇し，1973年には90%を超えた。その結果，1970年代後半は「一億総中流」ということばが頻繁に用いられるようになった[2]。日本におけるピアノの生産量は1980（昭和55）年になるとピークを記録した。またピアノの世帯普及率は高度経済成長期終焉以降も伸び，1980年代から急速に上昇し，1989年には2割を超えた。それに伴い，従来「高級文化」として表象されていたピアノ文化は，1980年前後から新たな展開を見せるようになったのである。

社会学においてピアノ文化に焦点を当てた実証研究はあまり多くはみられない。特に高度経済成長期終焉以降のピアノ文化を検討したものとなると極めて少ない[3]。文化資本や階層に関連する論文の中にはピアノという記述が散見されるが，それは日本においては，文化資本や階層を検討する際にはピアノという楽器が不可欠であることを意味している。たとえば片岡栄美は，1995年SSM全国調査データから，家庭の文化環境が社会階層や地位達成プロセスといかなる関係にあるかを検討している。片岡は，子ども時代の家庭での文化的経験，ピアノなどの家庭の文化的財，両親の学歴という3つの指標を変数として分析を試み，これらの3つの指標は強い関連性を持ちながら，子供の社会化に影響を与えていることを明らかにしている（片岡1997: 187–237）。ただこうした研究は，ピアノ文化そのものを対象としたものではない。ピアノ文化を対象とした研究の少なさには様々な理由が考えられるが，一般的には社会学的な分析の対象としてピアノ文化をどのように扱ったらよいのかという問題がある。

しかしながら，1980年代以降の日本社会におけるピアノ文化の分析に伴う困難さは，別のところに存在していると考えられる。現在日本ではピアノの学習は特別なことではなく，電子ピアノやキーボード等の鍵盤楽器で気軽にレッスンを受けている人が多数存在する一方で，アマチュアであってもプロになるための過程とさほど遜色のないレッスンを受けている人々も珍しくはない。こうしたピアノ学習者は高度な演奏技術を習得し，プロとの違いが以前ほど明確ではない。そのため踏み込んだ考察をするためには，日本のピアノ〈界〉の内実をも把握し，その上でピアノ文化を社会的に位置づけて分析することが必要不可欠になってくるからである。井上好人は，近年の音楽教育，とりわけピアノレッスンの形態や意味の変化，さらには幼少時のピアノ教育によって獲得された文化芸術的素養の転換可能性に注目し，日本のピアノ教育を検証している。また井上は，現在の家庭での音楽教育は「音楽教室」によるすそ野の拡大というよりも，個人の指導者の下でのレッスンを中心として，コンペティションによる学習者の個別化，選別化が進行し，音楽教育熱は密室化した空間の中でひそやかなブームであり続けている

と指摘している（井上 2008: 1–6）。しかしながら井上の分析では，1980年代以降の日本社会において，ピアノ文化が社会とどのように関わり，いかなる意味付与がなされて現在に至っているのか，その実情が捉えきれているとは言い難い。

本稿では，ピアノの世帯普及率に依拠して，1980年代以降の日本社会におけるピアノ文化を「ピアノ文化の繁栄期」と位置づけ，それがどのような様相を呈しているのか明らかにする。そしてこの時期のピアノ文化は社会的にいかなる意味付与がなされているのかを，インタビュー調査を用いながら考察する。インタビューは半構造化形式で，それぞれに対し1～2時間をかけて行った。ピアノ文化が家庭内で伝えられた西欧とは異なり，日本ではピアノ文化は常に社会と関連しながら普及している。そのため1980年代以降のピアノ文化に焦点を当てて検討することは，高度経済成長期を経た日本社会の特質の一端を見ることにもなるものと考えられる。

2. 高級なアマチュアの誕生

2-1. クラシック・ブームの到来とピアノ文化

日本社会は，1980年代の前半は第2次オイルショック後の経済成長率の低成長期，後半はバブル経済の発生，拡大，そして1990年代初頭のバブル崩壊という大きな変動を経験する。こうした状況において1980年代の日本の音楽界は，サントリーという大企業によって牽引された。サントリーは元々強力な広告部門をもっていたが，単に洋酒メーカーという枠組みを超えて1969年にはサントリー音楽財団を設立し，さらに1986年にはサントリー・ホールを開館した。サントリーは，この時期以降の日本の音楽界に強い影響を及ぼすことになった（日本戦後音楽史研究会2007: 227）。

サントリー・ホールの開館は，「オシャレ」なホールとして大きなブームを巻き起こした。渡辺裕は，このホールの存在が「クラシック」のイメージをすっかり変えてしまったと指摘している。サントリー・ホールの完成は日本の音楽文化全体の状況，特に聴衆のあり方を大きく変える意味合いを持った。このホールで行われる演奏会に行くと音楽そのものよりも，「オシャレ」なイメージが先行しているような感じを受けるというのである。クラシック音楽が「オシャレ」な商品になり，「差異」を表す記号になったのである（渡辺1989: 162–165）。

一方，サントリー・ホールが開館する約3か月前の1986年7月10日，ロシア（当時はソ連）出身の一人のピアニストが来日した。そして日本のクラシック音楽界は，この20歳のピアニスト，スタニスラフ・ブーニンの話題で独り占めにされた。1986年8月4日の『読売新聞』夕刊には，「ブーニン現象の持つ意味」と題した次のような記事が掲載された。

> 「ブーニン現象」「ブーニン・シンドローム」という言われ方がいまクラシック音楽の周辺で起こっている。昨年のショパン・コンクールで優勝したソビエトの若いピアニスト，スタニスラフ・ブーニンの初来日をめぐって，わが国では爆発的に人気が沸騰し，コンサートの切符は発売当日に売り切れ，レコードは店のほうが信じられないほどに買い手が殺到し，青年と学生向けに計画した一万人を収容する国技館（！）でのリサイタルが満員の人波で埋め尽くされたというのである。この人気はどんな超大家も及ばぬところである。（中略）旧態然たる枠の中にどうしようもなく組み込まれていると思われていたクラシック音楽の殻を破って，さっそうと登場したブーニンの姿をまずテレビの放映で知った人たちが，そこに現代の若き英雄のイメージを感じとり，普段クラシック

音楽と余り付き合わなかった人たちまでが関心を寄せたことが，このブームを呼ぶきっかけになったのだろう。

これは1985年のショパン・コンクールに弱冠19歳で優勝したスタニスラフ・ブーニンの，当時の日本においての異常なまでの人気を物語る記事である。この新聞記事はこの後，こうしたブームがピアノで起こったのは日本人がピアノに強い憧れを持ち，親は子どもにピアノの稽古をさせたがるが，この高級で難しい楽器を征服した若者ゆえにブーニンは英雄であると分析する。そして19歳のこの若者をアイドルのように使い捨てるか育てるかは，日本人の芸術的成熟度の問題だと続く。「ブーニン・シンドローム」の背景に日本人のピアノに対する強い憧れがあったか否かは，この時期のピアノ文化を考えた時，判断が分かれるところではある[4)]。ただそうは言ってもブーニンは，クラシック音楽という一般社会とはかかわりのなかった小さな世界から広い世界へ飛び出し，これまでクラシック音楽には縁のなかった新しい客層を開拓した。輪島裕介によると，こうした「ブーニン・シンドローム」は，いわゆるバブル経済全盛期に起こった「クラシック・ブーム」と無縁ではない。輪島は，1980年代後半は旧来の禁欲的ともいえる教養主義的なクラシック音楽の受容が大きな転換期を迎え，クラシック音楽が資本主義的な商品として消費されるようになったと指摘する（輪島 2005: 178）。端正ですらりとした風貌のブーニンには若い女性の熱狂的なファンも出現した。クラシック音楽，ピアノ文化がこれまでとは異なった感覚で社会に受け止められるようになったと言っても過言ではないだろう。

総理府統計局「家計調査」によると，日本の勤労者世帯における1世帯当たりの1か月平均実収入は，1980年にはヤマハU1シリーズのアップライトピアノの価格とほぼ同じくらいになった（本稿第4節）。高度経済成長期の初期にはまだ「高嶺の花」だったピアノも，1980年代にはちょっと無理をすれば買える品物となった。ピアノ文化が戦前かなえられなかった母親の夢として，あるいは品の良い家庭の子女の教養として，さらにはピアノ講師と言う新しい女性の生き方を提示するものとして普及した時代は終わった。1980年代になると，ピアノ文化は誰もが参入可能で子どものお稽古事としてスイミングなどと等価値の，単なる選択対象の一つになったのである。加えて音楽教室は1977（昭和52）年には，それまでヤマハ音楽教室で学んだ子どもたちの数が300万人に達していた。またその時点においてヤマハ音楽教室で音楽を学んでいる人たちは老若合わせれば50万人を超し，その及ぼす社会的な影響は大きいものであった（川上 1977: 2）。ヤマハ音楽教室以外でピアノを学んでいた子どもたちもそれ以上いたものと思われ，1980年前後からピアノ文化はそれまでの，大衆層を主要な支持基盤として普及し，「大衆文化」からの差異化を図るある種の「高級文化」として表象されていた「お稽古事」ではなくなり，一変した質を獲得するようになったのである。こうしたことから高度経済成長期に普及したピアノ文化は，クラシック・ブームの到来とともに，普及の時代から繁栄期を迎えたと考えられる。

2-2.　音楽大学の変化と受験教育

日本では西洋のようにピアノの演奏技術を家庭内で伝達するハビトゥスがなかった。そのためピアノ文化が普及した高度経済成長期には多くのピアノの指導者が必要とされ，「制度化された文化資本」として音楽大学へ進学し，ピアノ講師という職業に就く女性が増加した。ピアノ講師は，女性が生涯にわたって携わることができる職業とも考えられていた。私立音楽大学は戦前には少なかったが，戦後，高度経済成長と音楽活動の活発化に伴い多くの音楽大学，短期大学が設立され，教員養成大学の音楽専攻

を加えれば，1982（昭和57）年度における音楽を学ぶ学生の総数は33,700名に上った（上原 1988: 448–453）。ピアノ文化の普及に伴い，音楽大学は多数の卒業生を世に送り出してきたのである。ただそうした状況は社会の状況によって変化する。

表1と図1は，1986年以降の武蔵野音楽大学と国立音楽大学の，志願者数とその変化である。

表1　武蔵野音楽大学・国立音楽大学の志願者数

志願者数の変移				
年	年	武蔵野音大	国立器楽科	国立ピアノ科
1986	s61	973	401	202
1987	s62	973	423	236
1988	s63	1,000	457	237
1989	H 1	1,001	459	245
1990	H 2	1,030	460	227
1991	H 3	1,104	496	211
1993	H 5	1,107	483	238
1994	H 6	987	487	188
1996	H 8	904	452	167
1997	H 9	848	458	183
1998	H10	815	393	165
1999	H11	755	392	154
2000	H12		310	138
2001	H13		283	
2002	H14		268	
2003	H15		257	

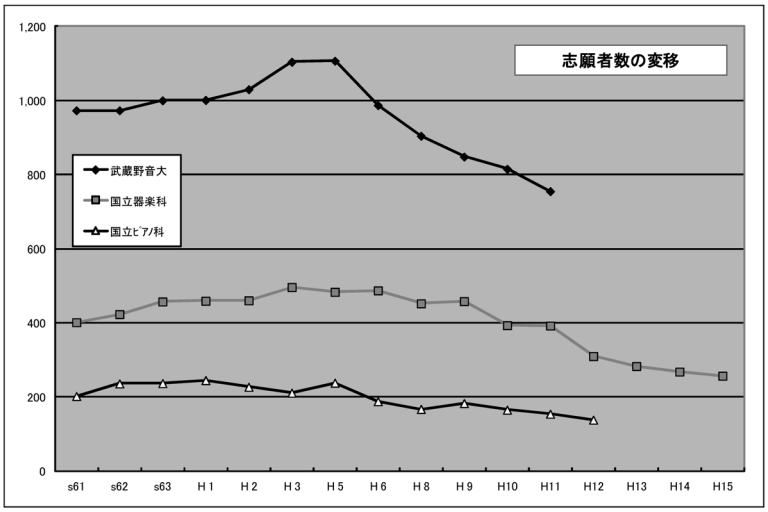

図1　音楽大学志願者数の変化
①武蔵野音楽大学はピアノ科を含む器楽科の志願者数を公表。2000年以降は非公表である。
②国立音楽大学はピアノ科と，ピアノ科を含む器楽科の志願者数を公表
出所：音楽大学の受験雑誌『音楽大学　学校案内』（音楽之友社）のデータにより筆者作成。

表1および図1を見る限り，高度経済成長期のピアノ文化の普及は，1990年代になっても初期には音楽大学志願者の微増に結びついていると言える。バブル期におけるクラシック音楽ブームが影響したことも否定できないが，依然として音楽大学への進学が「制度化した文化資本」として，ピアノ講師と言う職業を提供してくれると信じられていたからであろう。しかしながら1990年代中頃から，すなわち1980年前後に誕生した人々の大学進学時になると，音楽大学の志願者数は減少の一途をたどる。こうした変化は有名私立音楽大学として知られ，これまで多くの音大生を輩出してきた武蔵野音楽大学と国立音楽大学でも例外ではない。元来，音楽大学は実技試験があるため，一般大学のように多数の志願者を集めるのは困難であるとは言え，志願者の数は1994年からは徐々に減少している。クラシック音楽ブームやブーニン・シンドロームという社会現象が起きたバブル期に誕生，あるいは子ども時代を過ごした人々は，大学進学適齢期になっても音楽大学への進学を選択していないのである。

その理由として，一つには高度経済成長期終焉以降，音楽では経済的に豊かな生活は困難だと考えられるようになったことがあげられるだろう。音楽大学はプロの音楽家を育成する教育機関ではあるが，卒業してもプロの演奏家になれる人はごく少数である。それは現在クラシック音楽界で活躍している人の数をみれば一目瞭然であり，一般的に認識されていることでもある。それでもピアノ文化が普及した時代はピアノが弾けることは文化資本であり，親にとっても子どもにピアノを習わせることがステイタスシンボルの一つになっていた。また音楽大学の卒業生の多くはピアノ指導者としての需要が見込まれ，楽器店の講師といった就職口や自宅でのピアノ教師といった選択もあった。しかしながら少子化による影響で教職は狭き門になり，さらにはピアノ人口の減少や音楽関係の仕事の少なさ等により，次第に音楽では生活が成り立たない現象が起き，音楽大学への志願者に変化が起きたものと言える。

次に高度経済成長期の経済発展が，その後の教育事情に及ぼした影響も考えられる。日本のピアノ文化は高度経済成長期に，情操教育の名の下で民間の音楽教室等により普及した。さらに日本社会では，高度経済成長期の経済発展により高校進学率，大学進学率も急上昇した。卒業した大学が就職やその後の人生を左右すると信じられ，大学受験が過熱し受験戦争と言われるような状況に陥った。また女性の大学進学率も高度経済成長期以降は大きく上昇し，受験に対するこうした状況は現在でも少なからず続いている。2008（平成20）年の文部科学省による「子どもの学校外での学習活動に関する実態調査報告」は，小中学生の学校外での学習活動を1985年，1993年，2007年の3時点で経年比較を行っているが，この調査においても受験競争の影響が認められる。小学生が習いごとをしている割合は，3時点での経年比較では70%から80%の間で推移しているのに対し，中学生の習い事の割合は30%前後に低下する。同じ調査における学習塾の割合を3時点でみると，小学生は16.5%→23.6%→25.9%であるが，中学生になると44.5%→59.5%→53.5%になる。小学生は学習塾よりも習い事の割合が高く，中学生になると習い事は減り学習塾の割合が高くなる。一般的に習い事は小学生の間だけで，中学生になると将来の高校受験，大学受験を見据えて，学校外教育活動も学習塾等の勉強の方へ移行している。ピアノの演奏技術が優れていても有名普通大学への進学を見据え，学校の成績重視になっているものと考えられる。親がピアノ文化に期待する情操教育という要素は，1980年代以降もさほど変化はしていないと考えられるものの，そうした期待はあくまでも小学生までのようである。

さらに女性の職業に対する意識変化も看過できない。厚生労働省が2009年に発表した「平成20年版働く女性の実情」によると，1985（昭和60）年に男女雇用機会均等法（以下「均等法」）が制定されてからの20年間に大卒女性の社会参加が促進され，労働市場へ参入する女性の割合が高まっている。高

度経済成長期には，女性が生涯にわたって携わることができる職業と考えられ，女子の就労機会を増加させたピアノ講師は次第に女性にとって魅力的な職業とは言えなくなったようだ。なぜならピアノ講師は早々に結婚して，生活の補助的にピアノを教えるのが一番楽で賢明だと考えられている傾向がある。また一般的な世間の捉え方では，ピアノ講師は一部の専門的なピアノ教師以外は一人前の職業として認めてもらえない状況にあることも否定できないからである。それに対し均等法制定以降は，女性が男性と同等にフルタイムで働くことが珍しいことではなく，加えて女性が普通大学で培った自身の能力を企業等で発揮する機会も増え，それが音楽大学志願者の減少に結びついたと考えられる。こうした影響は女性の大学への進学率に表れた。均等法制定時の1985年の4年制大学への進学率は，男性38.6%，女性13.7%であったが，2008年の大学への進学率は男性55.2%，女性42.6%となり，約20年の間に4年制大学への女性の進学率は大きく上昇した。また均等法制定時以降の1987年から2007年における15～64歳の有業率をみると，男性が82.5%から82.7%と約20年間ほぼ横ばいのまま推移しているのに対し，女性は54.2%から61.7%と上昇傾向を示している。女性の学歴別有業率では中学卒業者は有業率が低下しているが，その他の学歴では上昇傾向にあり，特に大学・大学院卒業者については1987年の62.6%から2007年の72.6%へと上昇幅が大きい。こうした状況は今後も加速すると推測され，それに伴いピアノ文化，音楽大学に対する人々の捉え方も変化するものと考えられる。

ピアニストの中村紘子は音楽大学の志願者減少を，海外の例を挙げながら次のように述べている。

> そういう点では欧米に近づいているのですね。音楽は自らが苦労してやるというのではなくて，楽しむ側にまわっているのですね。例えば，ジュリアード音楽院を例にすると，50年代は南米の人たちが常にトップクラスを占めていましたね。それが60年代になると日本人で，70年代は韓国人が台頭してきました。その後に今度は中国人がやってきたのです。（中略）もちろんピアノをやる人の中には白人もいますが，プロまで目指そうというのは旧東欧圏やユダヤ系などの難民が多く，いわゆるアメリカの中枢を占めているアングロサクソン系の白人はほとんどいないのです。（中略）楽して楽しい人生を選ぶ傾向にあるようですね。ドイツなどでは30年以上も前からそうした風潮が見られますね。（中略）当時，ドイツではピアノは趣味にとどめて，医者や弁護士を目指す若者が多かった。一方，その頃の日本は真面目に音楽に取り組んでいる人が多かったものですから，「ドイツの伝統であるベートーヴェンやブラームスの演奏を受け継ぐのはこれからは日本でしょう」という人もいたくらいです（『ムジカノーヴァ』2002, 9月号: 17）。

この中村紘子の発言からは，ピアノは学ぶものではなく楽しむものだという価値観の変化が起きていることがうかがえる。確かに1980年代以降，日本でもピアノを楽しんでいる人は増加している[5)]。そのため音楽大学の志願者の減少が，直ちに日本のピアノ文化の衰退を表していると捉えるのは留保すべきであろう。むしろ音楽大学の志願者の減少は，日本のピアノ文化が音楽大学への進学という経路とは異なった方法でも醸成されていることを示唆している。

2-3. ピアノ・コンクールの意義と高級なアマチュア

音楽大学の志願者が減少し始めた1990年代半ば，日本のピアノ界では新たな試みがなされた。財団法人日本音楽教育文化振興財団の主催により，「第1回日本アマチュアピアノコンクール」が1996年に

開催されたのである。このコンクールは音楽高校や音楽大学で専門教育を受けたことがないピアノ愛好者を対象にしたもので，第1回から第4回までは，第1次予選にスカルラッティのソナタが課題とされた。ちなみに第3回の本選出場者は15名で，入賞者が演奏した曲目は，『ショパン：幻想曲ヘ短調』『シューマン：謝肉祭より11曲』『ショパン：アンダンテスピアナートと華麗なる大ポロネーズ』『ブラームス：幻想曲集作品116より5曲』である。このコンクールに対し鶴川一郎は以下のように講評している。

> 第1回は応募者の幅が広く，それだけに演奏も色とりどりで，個性の強い人が多かった。（中略）順位にだれも異論がなかったのは，まず他にぬきんでた高度な技巧の持ち主が目立ったことである。第2回は応募者の層の幅がだいぶ狭まった。（中略）レヴェルの上の方に固まってきたような傾向になった。それだけに今年の第3回は，いわば第1回と第2回を統合した環境を作り出していたといってよく，応募者の数も増大してきた。技巧と音楽の完成が程良いバランスを保っていることが求められたように思う。このような特徴が出てきたのは第2次予選の課題曲が影響しているかもしれない。また応募者の意識も広く深くなって生きたのは否めない現象である（鶴川 1998: 75）。

「日本アマチュアピアノコンクール」は2006年からは日墺文化協会が主催し，「国際アマチュアピアノコンクール」と改称されている。本選進出者の演奏水準は高く，本選に進むことはたいへん難しいと言われている。

従来の日本の音楽コンクールで最も権威のあるものは，毎日新聞社とNHKの共催で1932（昭和7）年以来行われてきた「音楽コンクール」である。このコンクールは音楽界に巣立つ優秀な音楽家を発掘する登竜門で，中村紘子などこのコンクールに入賞し第一線で活躍する音楽家は多数いる。また毎日新聞社は，1947年から新たに「全日本学生音楽コンクール」を主催した。ピアノとバイオリンなど，小，中，高校生を対象に審査が行われ，このコンクールの入賞者の大部分はその後音楽大学に進学し，卒業後音楽界で活動する人も少なくない。

子どもを対象にした音楽コンクールでは，上述した「全日本学生音楽コンクール」が有名である。しかしながら1980年代になると，社団法人・全日本ピアノ指導者協会が主催する「ピティナ・ピアノコンペティション」に参加するピアノ学習者が急増した。「ピティナ・ピアノコンペティション」は従来のクラシック音楽の専門家の輩出を目的としたコンクールとは異なり，全国のピアノ学習者を対象にして行われるピアノ・コンクールである。ピティナ（PTNA）とは社団法人・全日本ピアノ指導者協会（The Piano Teacher's National Association of Japan, Incorporated by the Japanese Government）の略であり，北海道から沖縄まで全国400か所に支部・連絡所・ステーションが存在し，地域に密着したピアノ教育活動を行っている組織である。ピティナは1966年，ピアノ講師であった福田靖子の下で東京音楽研究会の名称で発足し，1968年に全日本ピアノ指導者協会と改称した。1977年に第1回「PTNAヤングピアニスト・コンペティション」（後に「ピティナ・ピアノコンペティション」と改称）を開催，その後1985年に文部省所管の公益法人（社団法人）認可を受けた。

「ピティナ・ピアノコンペティション」は，毎年6月頃から全国200地区以上，300か所で地区予選が行われ，8月末，東京で全国大会が開催される。年齢によって参加可能な級が分かれており，それぞれ

の級に適切とされる課題曲4曲（バロック期，クラシック期，ロマン期，近現代から各1曲ずつ）が指定されている。参加者は自身の年齢に相当する級を受験する。自身が該当する級より上の級（課題曲の難易度が高くなる）の受験は可能であるが，下の級は受験できないことになっている。審査では各審査員が直筆の採点評（講評）を一人一人の参加者に向けて書き，地区予選，地区本選の参加者全員にコンクール終了後，当日に交付される。このコンペティションの延べ参加者数は，1994年には年間2万人を突破し，2009年には，延べ参加者数は30,603名を数えた[6)]。2009年，アメリカで開催された「ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクール」で優勝した辻井伸行は，11歳の1999年，「ピティナ・ピアノコンペティション」D級（中学2年生以下対象）の全国大会で金賞を受賞している。

またピティナは1990年に生涯学習の推進を目的として，従来のコンクール推進に加えシニア部門を設置した。シニア部門はその後グランミューズ部門と名を変え，Bカテゴリーでは音楽大学等のピアノ専攻で学習していないことを条件に，普段は社会人や学生として生活している人々を対象とするようになった[7)]。2004年のB1カテゴリー（18歳以上対象）のファイナリストが在籍する大学をみると，東京大学2名，早稲田大学，立命館大学，学芸大学，長崎純心大学，神戸大学，京都大学などであり，そのうち第1位は東京大学（リスト/ハンガリー狂詩曲第12番嬰ハ短調S.244を演奏），第2位は早稲田大学（ヒナステラ/ソナタNo.1 Op.22第1楽章）の学生である。さらに40歳以上を対象としたB2カテゴリーの第1位は日本大学法学部出身の女性（プロコイエフ/サルカムスOp.17）である。2004年の，グランミューズ部門Bカテゴリーの予選参加申込数は472名である。

一方，アマチュア対象のピアノ・コンクールが開催されるようになった時期には，普通大学においてもピアノサークルが定期的に演奏会を開催するようになった。

以下は六大学の学生によるピアノコンサートのプログラムである。

第6回定期演奏会

2001年5月12日（土）　三鷹芸術文化センター　風のホール

1.	ショパン	スケルツォ第2番変ロ短調Op.31（明治）
2.	リスト	超絶技巧練習曲第10番，第12番「雪かき」（慶應）
3.	シューベルト	即興曲D.899–1（東大）
4.	リスト	ハンガリー狂詩曲第2番（法政）
5.	ショパン	ポロネーズ第7番変イ長調Op.61「幻想」（明治）
6.	ジューマン	ピアノ協奏曲イ短調Op.54第1楽章（早稲田）
7.	ラフマニノフ	楽興の時変ホ短調Op,16－4
		前奏曲変ホ長調Op.23－6
		音の絵変ホ長調Op.33－7（立教）
8.	リスト	「詩的で宗教的な調べより」第1曲「祈り」（東大）
9.	ラヴェル	「鏡」より「洋上の小舟」（早稲田）
10.	ショパン	バラード第4番ヘ短調Op.52（立教）
11.	スクリャービン	ピアノソナタ第3番第34楽章（慶應）
12.	サン＝サーンス	ピアノ協奏曲第2番ト短調Op.22終楽章（東大）

（　）内は演奏者の在学校

ピアノ・コンクールでの選曲や六大学の定期演奏会のプログラムは，音楽大学進学に充分対応できる演奏技術がありながら，音楽大学への進学を選択しない人が増えてきていることを示唆している。ピアニストの中村紘子は，「アメリカは豊かな経済力を背景に高級なアマチュアが多い国である（『ムジカノーヴァ』2000年9月号：57）」と指摘しているが，その傾向は日本にもあてはまるようだ。

音楽大学の志願者が減少し始めた1990年代に，上述したようなアマチュア対象のピアノ・コンクールが創設され，また普通大学におけるピアノサークルの演奏会が定期的に開催されるようになったことは，この時期に日本のピアノ〈界〉において，高度な演奏技術を持ったアマチュア（以下，高級なアマチュア）[8] が，一つの潮流として重要な存在になってきたことをも意味している。

以上のように，日本においては音楽大学への進学者が減少する一方で高級なアマチュアが誕生した。そしてこうした高級なアマチュアの演奏技術を証明するものが，ピアノ・コンクールの存在である。プロの音楽家になることを目標とする人ばかりでなく，高級なアマチュアも様々なピアノ・コンクールに参加することが珍しくなくなった。こうしたことに鑑みると，1980年代以降のピアノ文化の繁栄を促進したものの一つがピアノ・コンクールだと言っても過言ではなく，ピアノ・コンクールの存在は1980年代以降のピアノ文化の特筆すべき事柄であると言えよう。日本アマチュアピアノコンクールやピティナ・グランミューズ部門は，現在においては高級なアマチュアたちの受け皿の一つになっている。高級なアマチュアたちは音楽大学に進学しなかったとしても，コンクールに参加することでその演奏技術を証明することが可能なのである。ただそうした状況は，一方ではピアノ文化に対する文化資本としての評価にも変化をもたらした。従来のように趣味として単にピアノを弾けるだけでは，差異化を図る文化資本とはならなくなったのである。

3.　贅沢趣味と受験競争

3-1.　インタビュー調査から読む高級なアマチュア

1980年以降に生まれた人たちにとって，ピアノ文化はどのような位置づけにあるのであろう。ここからはインタビュー調査の一部を紹介しながら，1980年代以降のピアノ文化について検討する。

バブル期にピアノを習い始めたRさんは1981年生まれで，現在32歳である。母親の勧めで5歳からピアノを習った。母親はピアノの経験は全く無いという。実家は山梨県で，以前は携帯電話の電波が届かなかったほど田舎だという。都内の一流大学の大学院修士課程を修了し，現在は大手企業の研究員をしている。大学ではピアノサークルに所属した。Rさんの両親は共に地方公務員であり，父親は市の要職に就き，母親が教育熱心であったという[9]。

（　）は筆者による補足

「えーっとね，クラスの女の子は35人クラスで，たぶん5，6人7人くらいはピアノを習ってたと思います。男の子は習ってた子，一人もいなかったですけど…学校の伴奏はやらされましたね，合唱大会みたいなのは。あと校歌を歌う時の伴奏とか，全校で，といっても小さい学校ですから，ただクラスだったら一番うまかったと思います。（ピアノを習っていたのは）高校1年くらいまでかな，最後に弾いたのが多分あれ，テンペスト？　多分テンペスト，一回弾きました，発表会で，高校1年くらいで。で最後が，最後の発表会が。高校くらいから全然練習する時間がなくて，なんか適当だったんですけど，最後はシューベルトの何だっけかな，曲聴けば思いだすんですけど，即興

曲かな？（大学のピアノサークルは）たくさんいましたよ。男の人が多いですけど。3分の2くらいは男の人。上手なのも男の人。男の人すごく上手いです。」

Rさんは，筆者のピアノやってて良かったですか，という質問に対して，

「良かったですよ，やっぱり何もしないで過ごしているよりは，良かったですね。それなりに音符もすぐ読めるし，そのへん教養としても普通に読めるし。お母さんに感謝ですね。習いごとを自分からやりたいって言ったことあんまりなくて，あの時なんでお母さんが…習っておいた方が良いって思ったんですかね。なんか塾もお母さんが中学くらいになったら行けみたいな感じで。（おかあさんは）熱心ですね，なんでだろう。やっぱ強制的にやらされていた方が良いですね…それこそ，あの田舎でよくぞみたいな感じ。で，塾とかも帰りお父さんとかお母さんの車で帰って，で，ピアノの時はお母さんが5時半くらいに職場から帰ってきて，そこから送ってもらって30分くらいかけてピアノ行って，車で。毎週やってたんです，よくぞやってくれた，今思えば。（小さいうちからずっと）行ってましたね，だんだんやっぱり前の日とかにあわてて練習するみたいな，そんな感じでしたけど。でもやっぱり音楽は得意になりますね，ピアノやってれば，大体こう，なんの楽器やっても大体できるから。音楽の授業はなんかレベル低いって感じ。でも私よりもうまい人高校の時はいて，男の子で。」

Rさんはコンクールにも出場していた。

「えーと，あっ，ピティナ，ピティナ（ピティナ・ピアノコンペティション）出ました。覚えてないんですけど，たぶん小学生の5，6年だとは思います。2回くらい出たような気がします。（同じピアノ教室からは）一緒に出たと言っても10人はいなかったですね。先生の娘さんは毎回出てて，6人くらいかな，いつも一緒に出てたの6人くらいな気がします。私より下で，あと一人二人くらいは上手い人がいたみたいで，あと先生の娘さんが，なんか（賞）取ってたんですけど」

1980年代以降は，ピアノ文化は日本全国津々浦々に浸透して行った。携帯電話の電波が届かなかったRさんの実家のような地域でも，女の子を持つ親はお稽古事の一つとして意図的に子どもにピアノを習わせるようになった。個々の家庭が学校のカリキュラムとは別に，文化に触れさせるという意識を持つことが珍しいことではなくなったのである。また1980年代以降のピアノ文化の特徴として，ピアノを習う男子が増加したことがRさんの語りから推測できる。従来は女子の文化資本というジェンダー的要素を強く持ったピアノ文化が，ジェンダー的拘束から解放され男子も選択する文化資本になった。さらにピアノ講師が生徒をコンクールに出場させることが，特別なことではなくなった様子がうかがえる。

それでは親はどのような気持ちで子どもにピアノを習わせていたのだろうか。二人の母親に語ってもらった。

二人の女の子を持つSさんは神奈川県出身，1961（昭和36）年生まれの専業主婦で都内の短大を卒業している。自身が子どもの頃，幼稚園に開設されたカワイ音楽教室でピアノ（当時はオルガンを使用）を習っていたため，二人の娘にピアノ，水泳を習わせたという。長女は1988（昭和63）年生まれで，

幼稚園の頃からヤマハ音楽教室幼児科でピアノを習った。しかしピアノは中学で止め，その後フルートに転向した。次女は1992（平成4）年生まれで，3歳の頃からヤマハ音楽教室でピアノを習った。次女は神奈川県内のトップクラスの進学校に通っていた。ピアノは高校の3年間も止めることなく続けていたため，音楽大学進学に対しても演奏技術では何の問題もなかった。しかし最終的に普通大学を選択し，現在は都内の公立大学の理工学部で学んでいる。また次女は，「ピティナ・ピアノコンペティション」において，全国大会には進出できなかったものの，地方大会本選に出場した。Sさんの夫は都内の大学を卒業し，大手企業に勤めている[10)]。

（　）は筆者による補足

「お父さんが，子どもたちの人間としての幅を広げてやりたい，無理のない範囲で可能な教育はするという方針を持っていたんですよね。そこは最終的に本人が決めたところで，どっち選んでも良いようにって言ってたけど，最終的にダメになった時のあれとして，集中力ついたし，これによっていろんな得たものあったよねって，自分を納得させたのかもしれないけど。（音大進学を選ばなかったのは）うん，うちの場合はお父さんだよね，でもぉ，あのまま行ってたかな，お父さんが（音大）行っても良いよって言ったら。うちはそんなに裕福じゃないから，贅沢に勉強してピアノやってて良いよって，先生みたいにやらせてあげれないです。あの，仕事でお金を稼がないといけない家なので，職業としてはどうかなっていうのはあったね。でも集中力はすごいよね。舞台の上であれだけの曲を弾くんだから」

次女は現在大学で軽音楽のサークルに所属しているが，サークル内に彼女ほどピアノが弾ける者はいないという。Sさんは「うちはピアノを弾いていれば就職しなくても良いというほど，裕福じゃない」と語ったものの，家ではグランドピアノを購入している。

男女二人の子どもを持つTさんは，福井県出身で1951年生まれの専業主婦である。都内の女子大を卒業している。自身は子どもの頃ピアノを習いたかったが，当時のピアノのお稽古はオルガンが主流だったことを，教師をしていた祖母が良しとせず，親の意向でスズキメソドによるバイオリンを習った。しかしバイオリンは自分で音をとらなければならず，それが難しく感じていたTさんは，子どもにはピアノを習わせたかったという。またTさんの夫は一流大学を卒業した一級建築士で，現在設計事務所を経営している。クラシック音楽の鑑賞が趣味であるという。Tさんの家庭ではグランドピアノを所有している[11)]。

長男は1980年生まれで国立大学の大学院を卒業し，現在大手企業に勤務している。

（　）は筆者による補足

「小学校1年からピアノを習わせてね，3年生の時に学校で合唱のピアノ伴奏を担当することになったんだけど，まあ，口うるさく練習させたのね。まあ伴奏は上手く出来たんだけどね，その日帰って来て『これ以上ピアノを続けさせるなら家を出ていく』と言ったのよ，だから止めさせたの…高校生になった時，友だち（男子）が弾くショパンの幻想即興曲を聴いたらしいのね，『妹にはピアノを続けさせたのに，なんで自分にはピアノを続けさせてくれなかったのか』って言ったんだから。当時のことを話してやったら，『それでも続けさせてくれればよかったのに』と言ったの

よ。どの口がそういう口を叩くんだと思ったけど，まあ，友人に頼んでまたピアノを習わせたのね。でも，ちょっと習ってやめちゃった。クシコスポストで終わりだったわね」

長女は1986年生まれで国立大学大学院を卒業し，現在大手企業の研究員をしている。3歳から高校2年生までピアノを習わせた。自分が音程をとるのに苦労したので，耳が効く方が良いだろうと判断し，小4まではスズキメソドのピアノを習わせたという。現在は両親の下から離れ会社の寮で生活している。

「何でも吸収して，めだって上達したので，小4からは個人の有名な先生についたのね。でもスズキメソドだったから，他のお弟子さんに比べて譜読みの力が弱くて，初見も効かなくてね，演奏技術もそれほどではなかったのよ。楽譜を読むより先に耳から入っちゃうのね。でもね，すぐに譜読みも演奏技術も上達して，ピアノ・コンクールにも出場したんだけれど…中学へ入ると成績が良くて，特に理数科が得意で勉強が好きだったから，本人がね，音大へは行かないって決めちゃったの。その時はレッスン料も高かったし，まあ，後は趣味で良いなって思って普通の先生に変えて…高2まで楽しんでピアノを弾いたのよね。大学時代は下宿の部屋に電子ピアノを置いていたんだから…娘には『ピアノはいやになったらいつ辞めても良いのよ』と言っていたんだけどね。でも娘は『お母さんが怖くてそんなことは言えなかった』と言っているの」

Tさんは，「子ども二人にピアノをやらせてよかったか」という質問に対しては，「そう思わないと救われないでしょ，息子にはもっとやらせればよかったと思うの」と語る。Tさんは現在自身でもバイオリンの勉強を続けている。

上述した母親二人のインタビューから，1980年代以降におけるピアノ文化は，高度経済成長期におけるピアノ文化普及の過程とは異なった様相を呈していることが認識できる。もはや戦後の高度経済成長期における，戦前に叶えられなかった母親の夢として普及し，同時に都市的な生活を手に入れるための必需品でもあったピアノ文化ではない。また女子の就労機会を増加させたそれとも異なっている。

次に，こうした高級なアマチュアになるような子どもを指導しているピアノ教師のインタビューを検討する。

1960年生まれのAさんは現在，桐朋学園大学音楽部付属「子供のための音楽教室」と自宅でピアノの指導を行っている[12)]。

（　）は筆者による補足

「だいたい優秀な子は，私が教えている優秀な子は小学校4年生で止めちゃいますから。勉強も出来てピアノも弾ける子って，小学校4年生で止めちゃいますから。なぜかっていうと中学校受験，みんな『桜陰』とかって入って行っちゃいますから。戻ってくる子もいるし，そんなに才能がなければ戻ってこない，でも相当必死にやらせるからそういうご家庭はやっぱり。文化的レベル高く育てようと思っているから。3歳くらいから10歳くらいまでの間相当，他の子の1.5倍から2倍くらい進んで。ソナタくらい弾けるようになっているから，まあまだ弾けるじゃないですか，その子たちがたとえばもうちょっと大きくなって，まあ，じゃちょっと余裕ができたから大学入ってピ

アノ始めましょっている子もいるわけでしょ。でもそれは音大は行かないじゃないですか。勉強できる子ってピアノもできるんで，大体がピアノ弾ける子は勉強もできますよ…偏差値の高い大学に入っている子もいるじゃないですか。そういう人が残っているんじゃないですか結局。ほっといても勉強できる子はできるんですよ。だからそういう子は文化的な方に時間をかけてあげた方がいいと思う…あとやっぱり一番の問題は家で練習をこつこつ一人でしないと上達しないっていうのが一つの問題なので。ポンと行ったところで仲間と一緒にやれば上手になるんじゃなくて，家でさせなきゃいけない。家庭環境が家でピアノやんなさいって，ちっちゃい子を座らせて，で，ちっちゃいうちは親が付き合わなければだめじゃないですか。親がそばについてて教えなきゃー。だって3，4歳だって弾けないでしょ…かってに育つ分野もありますよ。お勉強の方面とか。だけど手をかけてやらなきゃいけないものは育たないですよね。ピアノなんかもお母さんがやっぱりある程度まではきちんとおうちで見てきてくれる子は早く進むもん…（私は）もうピアノだけをエリートでやっている集団の家族しか見ないで生きてきたから。」

Ａさんは，5歳の時に幼稚園のヤマハ音楽教室でピアノを始めたが，すぐに頭角を現し，相愛音楽大学の先生についた。その後桐朋学園大学音楽部付属「子供のための音楽教室」に移り，桐朋女子高等学校音楽科，桐朋学園大学音楽部へと進学した。高校時代には「全日本学生音楽コンクール」高校の部で奨励賞を獲得し，現在は桐朋学園大学音楽部付属「子供のための音楽教室」と自宅でピアノの指導を行っている。こうした経歴から，ピアノ指導者として常にピアノのエリート集団のみに指導をしてきた。Ａさんが指導している生徒たちはピアノを一時中断しても，普通大学に入ってから再びピアノを楽しむ高度な演奏技術を持ったアマチュアになっているようだ。またＡさんは，最近はボランティアとして保育園で教えているが，そこで感じたことは「お母さんは知らん顔で，自分が家で見ている人は，恵まれた本当に2, 3%の人たちを教えている」ことであり，「ピアノだけをエリートでやっている集団の家族しか見ないで生きてきた」ことであるという。

一定の経済的資本が保証された時，それを何に投資するかは個々の家庭の文化的環境に依拠するところが多い。1980年代になると，各家庭の文化に対する志向性が学校外教育活動の一つとして，ピアノ文化を選択することを一般的な現象にしたと言える。一方日本社会は，1980年代から1990年代にかけて経済構造の変化を経験し，それまで信じられていた中流意識に陰りが見え始めた。クラシック・ブームはバブル期の終焉と共に沈静化したが，そうした社会的状況においてもピアノ文化は衰えることはなかった。むしろピアノ・コンクールの隆盛に象徴されるように，選別化，差異化が進行し，ピアノ文化は日本社会においてこれまでとは異なった意味合いを持つようになった。加えてピアノを習って高度な演奏技術を習得しても，音楽大学ではなく普通大学への進学を選択して，高級なアマチュアになる人々が増加した。音楽大学に進学しなくてもピアノの演奏技術において音楽大学出身者と遜色のない，あるいはそれ以上の演奏技術を持った高級なアマチュアが誕生したのである。こうした現象は，日本では高度経済成長期を中心とした1980年以前のピアノ文化の普及期にはあまり認められなかったものであり，日本におけるピアノ文化が新たな文脈の上に立っていることを意味していると考えられる。

3-2.　高級なアマチュアとして選択した贅沢趣味

我々は，趣味が何らかの形で人々の社会的区分と関係を持っているということに関しては充分認識し

ている。ブルデューは趣味を顕在化した選好と考え，生活様式において「差異化」「卓越化」の過程へ連なるとしている。さらにブルデューは必要性への距離の大きさによって，こうした趣味の持つ意味合いが異なってくるとして，必要趣味と贅沢趣味という概念を提示した（Bourdieu 1979: 198＝1990: 272）。石井洋二郎によると，ブルデューは無償の美的性向を動員できるゆとりがある，あるいは差し迫った必要性から解放されている趣味は贅沢趣味であり，必要性に拘束され，やむを得ず選択する趣味を必要趣味であると区別している（石井 1993: 206）。またブルデューは，音楽の趣味は最も階級をあらわにし，とりわけピアノは「貴族的な楽器」とみなした（Bourdieu 1979: 17,81＝1990: 30,118）。ブルデューにとり，ピアノは特別な楽器だったようである。そこで日本のピアノ文化をブルデューの主張に従って考察したい。

高度経済成長期を中心とした1980年代以前におけるピアノ文化は，ブルデューの言うところの必要趣味となる。なぜならこの時期のピアノ文化の特徴の一つには，女性の大学進学率が低かった時期であったにもかかわらず，女性の音楽大学への進学者を増加させ，ピアノ講師という職業により就労機会を増加させたという現象が認められるからである。それに対し高級なアマチュアにとっては，ピアノの演奏技術は生活手段ではない。この意味においては，彼らのピアノの演奏技術は，あくまでも差し迫った必要性から解放され無償の美的性向を動員できるゆとりがあるため，ブルデューの言うところの贅沢趣味になっている。確かにピアノを生業にしていないという意味においては，高級なアマチュアにとって，ピアノの演奏技術は贅沢趣味に分類されるかもしれない。しかしながら日本のピアノ文化における高級なアマチュアの様相は，ブルデューが提示した贅沢趣味とは異質であることは否めない。

日本社会は，1980年代にから1990年代初頭にかけて経済の転換期を迎えた。それは同時に学校教育においても転換期であり，1984年から1987年まで設置された「臨時教育審議会」の最終報告においては，初等中等教育の充実と改革として「個性を尊重し生涯にわたる人間形成の基礎を養う」ことがうたわれた。赤林英夫は，バブル期に「個性化」「生涯学習」の推進を図る教育政策が提言されたことは，衣食満ち足りた段階での「贅沢な教育消費」への志向とも言え，こうした臨教審の提言は，教育を含めた公的なシステムへの信頼の低下を背景として推し進められたと指摘している（赤林 2010: 293）[13]。その後日本社会はバブル経済の崩壊と格差時代を迎えるが，教育政策においては「ゆとり教育」が推進され，授業時数の削減や学校週5日制が実施された[14]。先述した「子どもの学校外での学習活動に関する実態調査報告」には，こうした経済状況や教育政策が子どもたちの学校外での活動に与えた影響が少なからずうかがえる。子どもたちが習い事をしていた割合を小中学生別に1985年，1993年，2007年の3時点で比較をすると，小学生は70.7%→76.9%→72.5%，中学生は27.4%→28.3%→31.2%で推移している。バブル期にかけての習い事の増加は家庭の経済状況の好転が影響していることは言うまでもないが，一方では個性化を重視した教育政策の下で，子どもの才能を伸ばしたいという親の願いが後押ししているとも推測できる。バブル崩壊後は親全般に経済的な余裕があるとは考えにくく，必要以上の出費は控えたものと思われるが，3時点の経年比較では中学生では増加し，小学生でそれ程割合が減少していないのは，ゆとり教育による時間的余裕に起因しているのかもしれない。

また上述の習い事の中で音楽関係の習い事に関して見ると，小中全体で女子は61.1%→63.7%→51.5%，男子は15.7%→17.4%→12.6%で推移する。ここにもバブル経済とその崩壊の影響が見てとれる。ピアノ教育者である飯田和子は，ピアノ学習者の親たちの変化を指摘している。それによると親とピアノ教師との関係が，かつてのように「入門させていただく」と言ったものではなく，親が自分のニーズに合わ

せて教室を選び，わが子に費やされた時間と労力に対して月謝を納めるというようなドライな関係に変化してきたと言う（飯田 1998：35）。高度経済成長期の頃のピアノ文化が普及した時期とは異なり，1980年代以降は，一般的にピアノ文化は子どもにとって強制的にやらせるようなものではなくなり，親は家庭の経済状況に加え，子どもの意に沿った形で，さらには学校教育の状況などに照らし，その時々に適合したピアノの学び方を選択しているものと考えられる。

しかしながら高級なアマチュアの親たちは，ピアノの学習をすべきか否かを必ずしも子どもの判断に任せてはいないようだ。飯田は，ピアノ学習者の親たちを五つの類型に分類している。1つ目は，どうせ長続きしないだろうけれど，人並みレベルまでは一応経験させたいという「世間並み指向派」，2つ目は，専門家にならなくても良いので，ほどほどに楽しめる程度に，のんびりとしたレッスンを希望する「リラックス派」，3つ目は，人前で何曲か弾ける曲を仕込んでほしいという「名曲集中派」，4つ目は，学校の通知表で良い成績をもらうための「点取り虫派」，そして5つ目は，教育に関心が高く創造性や感性の育成にピアノは不可欠と思う「バランス教育指向派」であり，子どもにピアノを習わせる親の動機は種々であるとしている（飯田 1998：34–35）。これは親のピアノ文化の捉え方が個々の家庭によって異なり，その違いがそれぞれの家庭の子どものピアノの演奏技術の違いに繋がることを示唆している。

1980年代以降に誕生した高級なアマチュアの母親たちは，戦後直後から高度経済成長期の初期に親の願いを背負わされ，恵まれた家庭の女の子として自身もピアノを習った世代である。加えて女子の大学進学率が低かった時代に大学へ進学している。そのため夫も大学以上の学歴を有している場合が多く，当然現在の自身の家庭の中には教育に対する文化資本やピアノ文化に対するハビトゥスも持ち合わせている。また練習の辛さというような，ピアノ文化の負の部分も充分認識している。とはいえ高級なアマチュアの母親たちは，ピアノで自分と同じ辛い思いをさせたくないというよりも，むしろピアノがそれほど大衆化していない時代に，自身がピアノを習ったことを肯定的に捉えている。そのため子どもの教育に関心が高く，ピアノを選んだからには一定のレベル以上の演奏技術を習得することを願っている。加えて高級なアマチュアの母親は，自身が教養や趣味の一部としてピアノを習わされたとはいえ，現在ではその程度のレベルでは文化資本にはならないことを充分認識している。そのため高級なアマチュア誕生の背景には，ピアノ講師のＡさんが語ったように「でも相当必死にやらせるからそういうご家庭はやっぱり。文化的レベル高く育てようと思っているから」という現実が存在する。またＴさんがたとえ「娘には『ピアノはいやになったらいつ辞めても良いのよ』と言っていたんだけどね」と述懐しても，娘には「お母さんが怖くてそんなことは言えなかった」という子どもとしての本音がある。高級なアマチュアにとってのピアノは，Ｓさんが「お父さんが，子どもたちの人間としての幅を広げてやりたい，無理のない範囲で可能な教育はするという方針を持っていたんですよね」と語ったように，あくまでも学歴と同等の比重を持つ教育の一環であり，それは高度経済成長期のピアノ文化における，良家の子女のお稽古事あるいは情操教育という類のものとはかけ離れている。ピアノは，ピアノ講師のＡさんが「家庭環境が家でピアノやんなさいって，ちっちゃい子を座らせて，で，ちっちゃいうちは親が付き合わなければだめじゃないですか」と語るように，本人の意思とは無関係に小さい頃から始めなければならない楽器と言われる。そのため勉強もピアノも優秀な子どもたちは，文化的レベルが高い高級なアマチュアになるために，小さい頃から必死でピアノの練習をやらされているのである。

日本におけるピアノ文化について中村紘子は「そういう点では欧米に近づいているのですね。音楽は

自らが苦労してやるというのではなくて，楽しむ側にまわっているのですね」と指摘した。日本における高級なアマチュアは，結果としては確かに音楽を楽しむ側に回ってはいるものの，高度な演奏技術を贅沢趣味として身体化せねばならないため，小さい頃はプロフェッショナルになる場合と遜色のない過程を経ている。ただインタビュー調査からも明らかなように，年齢が進み多くの子どもたちがお稽古ごとから学習塾に切り替わることは，高級なアマチュアも同様である。しかしながら彼らは親の望み通りに身に付けた演奏技術を保持するために，自分なりの方法で学業との両立を図るか，あるいはピアノを一時中断し，大学進学後に再度ピアノ文化へ参入している。その時々の状況に応じたピアノの学び方を選択しているようである。

ブルデューは差し迫った必要性から解放されて，無償の美的性向を動員できるゆとりがある趣味を贅沢趣味と定義した。確かに1980年代以降に誕生した高級なアマチュアにとって，ピアノの演奏技術は最終的にはブルデューが言うところの贅沢趣味に帰着するかもしれない。しかしながら小さい頃から必死に練習を続けてきた彼らにとって，ピアノは教育という名の下に親が選択した差異化に繋がる必要不可欠な趣味であり，文化資本である。その意味においては日本における高級なアマチュアの演奏技術は，必要性に拘束された贅沢趣味と考えられ，それはブルデューが提示した必要趣味，贅沢趣味の概念だけでは捉えきれない側面を有している。子どもにとって高度な演奏技術の習得は，親から与えられた課題でありながら，子どもはその演奏技術を職業とする道ではなく，生業ではない趣味にすることを方向づけられたのである。高級なアマチュアとして贅沢趣味にする道を「選択」したのである。日本における高級なアマチュアの演奏技術は，教育の一環として習得させられた「選択的贅沢趣味」と言えるだろう。

4. ピアノ文化の繁栄

明治期日本に移入されたピアノ文化は，昭和に入っても戦前は限られた人たちだけの特権的な文化であった。日本のピアノ文化におけるそうした初期の様相は，19世紀ヨーロッーパの新興ブルジョア家族が，娘たちにピアノを習わせた姿と通底するものがある。しかしながら日本のピアノ文化は，戦後は音楽教室により日本独自の普及の様相を示し大衆化した。それに対し西欧では高橋一郎が指摘するように，ピアノは中産階級のライフスタイルと分かちがたく結びついていたため，この階級に到達していないものは自らの住居にピアノを持ちこむことはない。それは騒音や設置スペースの問題というよりは，階級のライフスタイルの問題だからである（高橋 2001: 165）。筆者が行ったピアノ文化に対するインタビュー調査でも，フランス人留学生は「（ピアノは）妻の家にはあったんですね。実家にね。あったんですけど，やっぱり（妻の家は）真ん中の階層のアッパーですから，だけどぼくはなかった。そうですね，（ピアノが各家にあることは，フランスでは）あんまりないですね」と語った[15]。

2009年にベネッセ教育総合研究所が3歳～17歳の子どもを持つ母親15,450人を対象に行った調査によると，子どもが音楽や芸術に触れる機会を増やしたいと思っている母親は全体で91.8%，子どもにとって音楽や芸術の活動は必要だと思っている母親は全体で85.4%に上る。さらに子どもが行っている芸術活動のランキングについて詳しくみると，トップは楽器の練習・レッスンで，全体の20.2%になる。なかでもピアノやエレクトーンなどの鍵盤楽器を選択している子どもは全体で14.8%（女子は22.6%）になる。これは2番目に多く選択されている芸術活動である絵画の4.0%を大きく引き離している。また先述した文部科学省の調査報告においても，2007年時点でピアノの指導を受けた割合は小中

全体で29%（男子10.1%，女子45.7%）になり，習字やダンスなど様々な習い事の中で最も多くなっている。日本では子どもに学校外教育活動を行う場合ピアノが選択されることが非常に多く，西欧の楽器をめぐる活動であるとは言っても，ピアノ文化は以前の良家の子女のお稽古事というような意味合いは希薄になった。日本の子どもの教育活動において，もはやピアノ文化は必要不可欠な文化になっている。しかしながら多くの子どもたちがピアノを学ぶ一方で，ピアノ文化の捉え方は1980年代以降，個々の家庭によって異なるようになった。そうした結果として高級なアマチュアが誕生したのであるが，それを後押ししたものの一つは言うまでもなく親の経済的状況である。

日本の勤労者世帯における1世帯当たりの1か月平均実収入をみると，1960（昭和35）年は40,895円であり，ヤマハのアップライトピアノ・U1シリーズは，1960年頃は19万円前後であった。それに対し1980（昭和55）年は，1か月平均実収入は349,686円であり，アップライトピアノ・U1シリーズは，1980年頃は35万円くらいになった。ピアノの普及率も1980年代から急速に伸び，バブル経済期には増加の一途をたどり1989年には2割を超えた。アップライトピアノは1980年代には，もはや特別な高級品としての性格は無くなった。そしてこの頃から，グランドピアノを購入する家庭が増加してきた。

表2，図2は勤労者世帯における1世帯当たりの1か月平均実収入とピアノの価格とその変化を示したものである。

ピアノが普及し始めた1965年頃は，1か月の実収入に対しアップライトのピアノの価格は3倍くらいであった。そのためピアノは「高嶺の花」であり，ピアノは豊かさを象徴する文化資本であった。子どもに対する教育的なまなざし，ピアノ文化に対する親和的なハビトゥスを持っている家庭によってアップライトピアノは所有されていた。そしてこうした状況は，アップライトピアノが特別なものでなくなった現在ではグランドピアノを所有するという形に変化した。ちなみにグランドピアノも現在は，勤労者世帯の1か月平均実収入の約3倍である。グランドピアノはアップライトに比べ，ピアニッシモからフォルテッシモまで豊かに響き音に微妙な表情をつけられる。また1秒間に可能な打鍵数は，グラン

表2　勤労者世帯における1世帯当たりの1か月平均実収入とピアノの価格

年	年	実収入	アップライト	グランドC3
1950	S25	13,238	195,000	
1955	S30	29,169	195,000	
1960	S35	40,895	195,000	
1965	S40	65,141	184,000	
1970	S45	112,949	197,000	550,000
1975	S50	236,152	350,000	900,000
1980	S55	349,686	350,000	950,000
1985	S60	444,846	450,000	1,100,000
1990	H 2	521,757	480,000	1,139,000
1995	H 7	570,817	540,000	1,500,000
2000	H12	560,954	560,000	1,600,000
2005	H17	522,629	590,000	1,600,000
2010	H22	521,056	640,000	1,950,000

①ピアノの価格はその年の1月の価格である。
②アップライトピアノはU1シリーズであるが，2000年1月からはYUシリーズ。グランドピアノはC3シリーズである

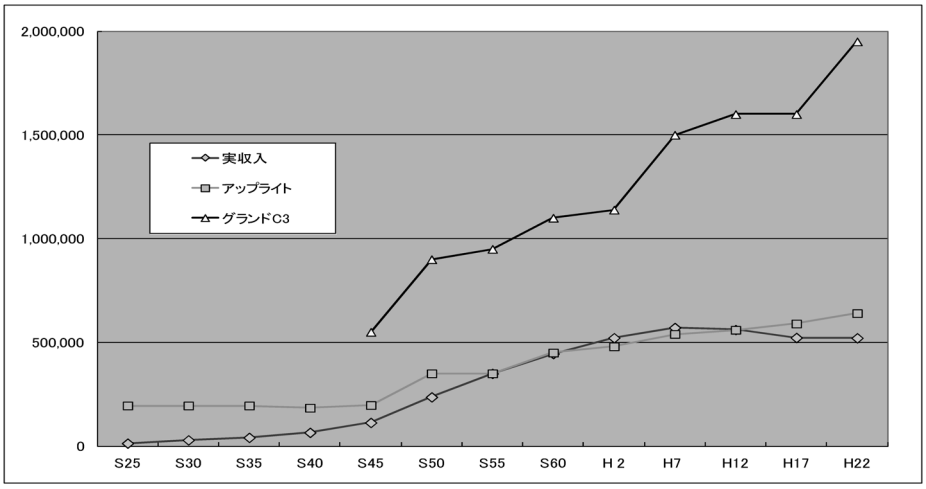

図2　勤労者世帯における1世帯当たりの1か月平均実収入とピアノの価格の変化。
出所　表とグラフは，総務省統計局「家計調査年報」，及びヤマハアップライトピアノ，グランドピアノ品番・年代・価格一覧より筆者作成。

ドピアノは約14回であるがアップライトは7回であり，グランドピアノの方がトリルなど細かな連打が思うままにできるなど，より豊かな表現力がある。ピアノ・コンクールで良い成績を収めるにはグランドピアノでの練習が必須であると言われ，グランドピアノを所有する家庭で勉強と同様にピアノを学んできた人たちが，高級なアマチュアになっているのである。

さらに高級なアマチュアの誕生を助長したものとして，ピアノ・コンクール，特に「ピティナ・ピアノコンペティション」の存在を看過することはできない。ピアノ人口が減っている現在，ピアノ・コンクールへの参加の是非は本人や親のピアノ文化に対する意識や価値観を反映していると考えられる。本来単なる趣味としてピアノを弾く場合，コンクールへの参加にはそれほど必然性が感じられないが，現在国内では多種多様なピアノ・コンクールが存在し，ピアノ・コンクール熱が高くなっている。かつて唯一のピアノ・コンクールであった「全日本学生音楽コンクールピアノ部門」では，参加できる人はピアノに携わる人間のほんの一握りの人たちだけであったため，多くのピアノ学習者にとってピアノを本格的に弾くための術はなかった。生徒も指導者も何の疑いも持たずに部屋に閉じこもってピアノを弾いていた。しかしながら「ピティナ・コンペティション」が開催され，下は就学前の幼児（A2級）から誰でも気軽に参加できるようになった。さらにこのコンペティションは，全国の約300か所で受験できるため，学習者のレベルにおいて多少の地域差が出るものの，その差は全国大会に出場することによって学習者や指導者が認識し，地元に帰ってからの新たな目標となった。また「全日本学生音楽コンクール」とは異なり，入賞者の指導を行った先生に「指導者賞」が授与されるため，全国のピアノ指導者のコンクール熱をも煽ることになった。第1回が開催されて以降，年を追って規模が拡大し，参加者の周辺はコンペティションで賞を獲得することだけが目的となり，ピアノの学習という面が疎かにされるという指摘がされるようにもなった。そのためこの「ピティナ・ピアノコンペティション」に対して，批判的な見方があることも確かである。しかしながら客観的に日本のピアノ文化への影響という側面から見た場合，「ヤマハ音楽教室」の開設と共通する部分がある。「ヤマハ音楽教室」の開設によって，これ

まで一部の人にかぎられていたピアノ文化が才能に関係なく全ての人に開放されたように，「ピティナ・ピアノコンペティション」が開催されるようになって，これまで音楽大学進学を目的とするような一部の人にかぎられていたピアノ・コンクールが一般のピアノ学習者にも開放され，ピアノ学習者の演奏レベルが確実に上がったと言えるだろう。こうした状況は高級なアマチュアを誕生させるための土壌となったと言っても過言ではない。

高級なアマチュアは親の経済資本やピアノ・コンクールを糧として，高度な演奏技術を獲得した。インタビューからも明らかなように，高級なアマチュアの家庭では，ピアノは勉強と同じくらいの比重を持つ教育の一環だった。彼らは総じて学校の成績も良いため，一流大学へ進学することで自身も経済資本を所有し，同時に「身体化された文化資本」として優れたピアノの演奏技術を獲得した。ピアノの演奏技術は，むしろ音楽大学に進学しなかったからこそステイタスになっている。ここで2009年に「ピティナ・ピアノコンペティション」グランミューズ部門・A2カテゴリー第1位のＭさん（埼玉県），B2カテゴリー第1位のＮさん（兵庫県）の経歴と言葉を紹介したい。A2, B2カテゴリーの参加資格は40歳以上である。

Ｍさん

東京大学大学院，米国ミシガン大学経営大学院修了。メーカー勤務。3歳より打楽器，5歳よりピアノを始める。大学卒業以来の長年の中断を経て，約3年前にピアノを再開。

…全国決勝進出が決まってから決勝当日までの2週間弱は特に，自分の演奏の録音の繰り返し聞くこと…（中略）改めて勉強不足を痛感した密度の高い2週間でした。今回のコンペを新たな出発点として勉強を続ける所存です。

Ｎさん

京都大学医学部及び同大学院卒。（中略）学生時代は京都大学音楽研究会を中心に演奏活動を行うが，卒後は本業多忙のためピアノを中止。9年前の渡米を期に再開し，渡米中にボストン（2001）とパリ（2002）の国際アマチュアコンクールでセミファイナリスト。帰国後，PTNAグランミューズ2004年B1部門全国決勝，2005年A1部門西日本本選優秀賞，2007年B2部門全国決勝。

…時間的に余裕ある海外在任中に再開したピアノですが，帰国後は再び休止状態に陥っていました。そんな時に本コンクールの存在を知り，ピアノを続ける励みにと参加を始めました。（中略）アマチュアの真骨頂は好きな曲を憚ることなく好きなように弾けるところにありますが，今回の受賞を期に，もう少し聞くに堪える演奏ができるよう精進したいと存じます…（『OUR MUSIC』281号：104–105）

両者は，本稿で対象とした1980年代以降に生まれた高級なアマチュアではない。しかしながら子どもの頃に身体化したピアノの演奏技術を生涯の趣味とするということに関しては，高級なアマチュアの親たちが我が子に望んだ姿を体現していると言えよう。

ただ両者の経歴が示すように，高級なアマチュアは多くの場合，一度社会に出ると思うようにピアノ

を楽しむことは難しいようである。大手企業の研究員を娘に持つTさんは「今ね，娘は仕事が忙しくてピアノは弾いていないのよ。リビングのグランドピアノが邪魔なので，処分しようかと言うと，今はピアノのふたも開けないのに『それは止めて』と言うんだよ」と語る。1980年代以降に生まれた高級なアマチュアたちは，現在は職業人として多忙な日々を送る年代である。彼らが身体化した高度な演奏技術をこの後どのように活用するのか，また親となった時，子どもたちにピアノ文化を継承するのか等，高級なアマチュアの行方に関してはいくつかの問題が残る。これらは今後の課題として，継続して高級なアマチュアにインタビューを実施することで明らかにしたい。

最後に，現在日本の子どもの多くがピアノ文化を経験していることは，ピアノ文化が決してクラシック音楽だけに限定されず，広範囲の音楽産業へ繋がっているということに言及したい。現在のピアノ教育は演奏技術のみならず，ソルフェージュを始めとした総合的な音楽教育を重視している。そのためピアノ文化の経験を持つ子どもは，成長して様々な音楽ジャンルへ拡散している。クラシック音楽の領域ではプロになることを避け高級なアマチュアが増加している一方で，それ以外ではむしろミュージシャン，音楽プロデューサーなどポピュラー音楽に関連する多様な領域でプロフェッショナルの道を目指す人が少なくない。ピアノ文化の経験者がクラシック音楽に囚われず，ポピュラー音楽を選択してプロフェッショナルの領域に踏み込んでいく状況は，世の中一般に好まれ頻繁に聴かれる音楽の大部分がポピュラー音楽であることを考えれば想定外の事ではない。これもピアノ文化の繁栄がもたらした一つの側面と言えよう。

5.　おわりに

以上，1980年代以降の日本社会におけるピアノ文化の様相について考察してきた。その過程で，高度なピアノの演奏技術を身体化しているにもかかわらず，音楽大学へ進学しない高級なアマチュアたちが増加していることを明らかにした。日本社会では確かに1990年中頃から，就職難等で音楽大学の志願者は減少する。しかしながらそれは，日本のピアノ文化が衰退したのではなく，音楽大学とは別の場でもピアノ文化が醸成されていることを示唆していた。音楽大学の志願者が減少した時期を同じくして，アマチュアを対象としたピアノ・コンクールが創設され，それに参加する人たちが増加したのである。

高級なアマチュアの演奏技術は音楽大学進学者と遜色のない場合も多く，そうした演奏技術は，我が子の文化的レベルが高くなることを望んだ親が子どもに課した課題であった。1980年代以降，バブル期から格差時代という時間の流れの中で，音楽を職業としない高級なアマチュアが誕生したことは，受験競争や女性の社会進出というような日本の社会状況を反映しているものと考えられる。高級なアマチュアは受験勉強に切り替わる前に，ある程度の演奏技術を身体化し，そのうえで必要趣味としてプロの道を進むのではなく，高級なアマチュアとして贅沢趣味にすることを選択したのである。加えて彼らにとってピアノ文化は，勉強と同等の意味を持つ教育の一環だった。こうしたことに鑑みると日本における高級なアマチュアの演奏技術は，フランス社会を分析したブルデューの贅沢趣味の概念だけでは捉えきれない側面を有した「選択的贅沢趣味」と言える。

しかしながら1980年代以降のピアノ文化は，本稿で取り上げた高級なアマチュアの誕生という視座だけで論じられるものではない。この時期はピアノ文化に対するとらえ方も多様になり，高級なアマチュアが誕生する一方で，安価なキーボード等により，ピアノ文化に気軽に参入する人々も増加してい

る。今後，1980年代以降のピアノ文化を社会学的視座から捉えるためには，今日の多様化が進む日本社会に即した多側面からの議論が不可欠であると考えられる。

注

1) 本稿におけるピアノ文化とは，「ピアノあるいはピアノに類似した鍵盤楽器等で，レッスンを行ったり演奏したりすること」と定義する。
2) なかでも「中の中」と答えた人々は，1970年代後半は約60%に達している。
3) 1980年以前のピアノ文化についてはいくつか研究がなされている。例えば神澤志摩は，趣味はいかに選択されるかという視点から，幼少期のピアノレッスンにおける導入スタイルについて検討している（神澤 1999: 57–33）。高橋一郎は，音楽教室に注目し，高度経済成長期の「中流文化」としてのピアノ文化の意味を検討している（高橋 2001: 156–174）。
4) 理由の一つとして，1974年に神奈川県平塚市で「ピアノ殺人事件」が起こり，この頃から騒音問題としてピアノに対する逆風もあったからである。詳細は上前淳一郎『狂気ピアノ殺人事件』（1982，文春文庫）を参照のこと。昭和50年前後の日本の家庭では，被害者家族のような狭い3DKといった住居環境はごく一般的であり，こうした集合住宅であっても女の子のいる家にはピアノがあることは珍しくはなかった。
5) 筆者は，慶應大学社会学研究科修士論文『日本におけるピアノ文化の変容―クラシック音楽の歴史社会学的考察』において，1980年代以降，クラシック音楽に限らず気軽に好きな曲を弾いてピアノの演奏を楽しんでいる人々が増加したことを明らかにした。
6) 筆者は以前，ピティナの賛助会員に属していた。なお，「ピティナ・ピアノコンペティション」の地区予選は2か所受験できるため，参加者数は延べ人数となる。
7) グランミューズ部門にはBカテゴリーの他に，音楽大学のピアノ専攻を卒業した音楽愛好者も参加できるAカテゴリーがある。
8) 本稿における高級なアマチュアとは，「普通大学に進学して音楽関係以外の職業につきながらも，高度なピアノの演奏技術を持っている人」と定義する。
9) 2011年10月29日にインタビュー実施。
10) 2010年9月9日にインタビュー実施。
11) 2013年5月24日にインタビュー実施。
12) 2010年8月19日にインタビュー実施。
13) 高度経済成長期には加熱する受験戦争の一方で，「落ちこぼれ」や「校内暴力」等の問題が浮かび上がり，学校の荒廃に対する不信も生じていた。
14) 1992年には第2土曜日が，1995年からは第4土曜日も休日になり，2002年には完全週5日制になる。
15) 2011年10月3日にインタビュー実施。

参考文献

赤林英夫，2010，「バブル経済以後の学校教育と教育政策」内閣府経済社会総合研究所企画・監修，樋口美雄編『労働市場と所得配分』慶應義塾大学出版会，287–317.

ベネッセ教育総合研究所　第1回学校外教育活動に関する調査　調査報告書　2009年.

Bourdieu, Pierre, 1979, *La Distinction: Critique Social du Jugement*, Edition de Minuit.（＝1990, 石井洋二郎訳，『ディスタンクシオン: 社会的判断力批判（I, II）』藤原書店.）

本間千尋，2012，「日本におけるピアノ文化の普及――高度経済成長期の大衆化を中心として」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』2012年，第74号，33–54.

福田靖子，2002，『音楽万歳――働いて働いて，そして働いた』ショパン.

稲垣恭子，2007，『女学校と女学生　教養・たしなみ・モダン文化』中公新書，28–31.

井上好人，2008，「幼児期からのピアノレッスンによって身体化された文化資本のゆくえ」『人間科学研究』第2巻，第1号，金沢青陵大学人間科学会，1–6.

飯田和子，1998，「〈音楽〉で教えられるものは何でしょう」『ムジカノーヴァ』9月号，音楽之友社，34–38.

今田高俊，2000,「ポストモダン時代の社会階層」今田高俊編『日本の階層システム5　社会階層のポストモダン』東京大学出版会，3–56.
石井洋二郎，1993,『差異と欲望』藤原書店.
神澤志摩，1999,「趣味選択の一形態――幼少期におけるピアノレッスンの導入スタイル」『成城文藝』166号，57–33.
片岡栄美，1997,「家庭の文化的環境と文化的再生産過程　および現代日本の文化構造」『関東学院大学文学部紀要』81号，187–237.
川上源一，1977,『音楽普及の思想』財団法人ヤマハ音楽振興会.
厚生労働省，2009,「平成20年版　働く女性の実情」http://www.mhlw.go.jp
前間孝則・岩野裕一，2001,『日本のピアノ100年――ピアノづくりに賭けた人々』草思社.『ムジカノーヴァ』，1998年9月号，2000年9月号，2002年9月号，音楽之友社.
文部科学省，2008,「子どもの学校外での学習活動に関する実態調査報告」http://mext.go.jp（2014/1/15）
日本戦後音楽史協会，2007,『日本戦後音楽史　下』平凡社.
西原稔，1995,『ピアノの誕生――楽器の向うに「近代」が見える』講談社.
『Our Music』246号（2004），281号（2009），社団法人・全日本ピアノ指導者協会.
政府統計の総合窓口　http://www.e-state.go.jp（2013/9/25）
高橋一郎，2001,「家庭と階級文化――中流文化としてのピアノをめぐって」柴野昌山編『文化伝達の社会学』世界思想社，156–174.
統計局ホームページ／第20章家計　http://www.stat.go.jp（2013/9/25）
鶴川一郎，1998,「新しい地平を拓くコンクール　第3回日本アマチュア　ピアノコンクール」『ムジカノーヴァ』9，音楽之友社，74–75.
中央教育審議会初等中等教育分科会（第43回）議事録配布資料http//www.mext.go.jp（2014/1/15）
上原一馬，1988,『日本音楽教育文化史』音楽之友社.
輪島裕介，2005,「クラシック音楽の語られ方　ハイソ・癒し・J回帰」渡辺裕・増田聡ほか『クラシック音楽の政治学』青弓社，175–211.
渡辺裕，1989『聴衆の誕生―ポスト・モダン時代の音楽文化』春秋社，1998年.
ヤマハ・ホームページ　製品情報　http://.jp.yamaha.com（2013/9/26）